

農業における人づくりと学習

狩野 浩 二

(2002年10月11日 受理)

The Social History of Socialization and Two Study Theories in Agriculture:
Succession of Agricultural Technology, and Formation of an Agricultural View

KARINO Kouji

Summary

Two study theories exist in the social history of socialization in agriculture. One is a view that sees the mastering of skills by following another's example ("NARAU," expressing it as "NARAU" in Japanese, to learn). This way is the prized method a traditional craftsman uses to master technology. Moreover, it is the method of socialization valued in traditional communities. Another is a view that sees learning of technology mainly through language, arts, and sciences ("MANABU," being close to the concept of "study" as used in the field of educational science). This system studies the contents as they are equalized, in any way or any place. These two characteristic examples are found and investigated in this paper. Consequently, intuition based on valuing experience, for example tips, etc., are indifferent to pursuing the rational way of life as a man, or pursuing advanced agriculture practice, such as shortening working hours, and the practice of environmentally conscious agriculture. While the direction of type <NARAU> is excellent in mastering the body-ized technology, <MANABU>, in contrast, suggests an eagerness for conquering the subject of agriculture in the present age. There is a problem in that this side, or the traditional one, will not be told. Research and practice of socialization combining both study theories is called on from now on.

目次

1. 二つの農家
2. A氏の場合
3. B氏の場合
4. 環境保全型の農業と二つの学習論

1. 二つの農家

筆者ら^{*1}は、沖永良部島のA農家とB農家からの現地聞き取り調査を2001年7月下旬に実施した。調査地は、和泊町国頭字である。この地域における農業技術の継承や農業観の実態を分析することを目的として、調査研究を行なってきた。

和泊町のある沖永良部は、周囲を海に囲まれた小さな島である。島は、「九州本土から南西方に飛石状に延びる種子・屋久・トカラ、奄美・沖縄、宮古・八重山の南西諸島弧の大体中間部に位置」^{*2}している。「鹿児島市へ約530キロメートル、名瀬市と那覇市へは170~180kmの地点にあ」^{*3}り、「気候は多湿・亜熱帯性で照葉樹林の生育に好適であるが、夏から初秋の台風常襲地帯として知られている」^{*4}地域である。

A農家は、筆者が面接聞き取り調査をした2001年7月現在で、就農から24年目を迎えている大規模農家である。現在は、ユリ、グラジオラスなどの花卉の他、馬鈴薯を栽培している。A農家は、同地域において非常に効率的な農業経営をしている。この農家の一年あたりの純利益が2000万円近くになる。和泊町の国頭地域は、農林水産分野における“むらづくり部門”で天皇杯を受賞した。いわゆるむらづくり日本一となった地域である。国頭地域における農村リーダー的な存在がA氏である。

A農家の経営主体となるA氏は、1950年代の後半に国頭に生まれた。鹿児島県内の高等学校を卒業後、しばらくの時間を同地域で過ごした。その後、1970年代に故郷での就農を決意している。現在までふたりの子どもを育てあげてきた。この地域で従来型の安定した農業経営を展開している専業農家である。

B農家は、グラジオラスなどの花卉栽培を中心に農業を行なっている。2001年において就農15年目を迎えた。同地域内での中規模の専業農家である。この農家の経営主体となっているのがB氏である。B氏は、農業を継いでいた家族を病で失ってしまった。その後、1980年代の中頃に家業継承を決意する。故郷の国頭に戻り、家業である農業経営を受け継いだ。

B氏は社会に出て後、研究者に師事しながら勉強をしてきた。その勉強を生かして故郷に戻るまでの間には、関西地方で学習塾を運営していた。現在の農業収入は未詳であるが、B氏によれば、利潤のほとんどを設備投資や農業機械の開発費用などに充てている。現状は、必ずしもゆとりのある経営状態であるとは言えない^{*5}という。A氏とは対照的に農業機械の考案や開発に投資したり、環境問題への関心を深めたりしている。B農家は、起業型の現代的農業経営を同地域において展開

している。

2. A 氏の場合

A 氏は、沖永良部島から九州内の県立高等学校に進学した。沖永良部島には県立高等学校がある。島では、この高等学校へ大部分の中学生が進学する。その一方で、高等教育への進学をめざす親たちは九州や関西、関東の中学や高等学校に子どもを進学させることがある。卒業後は、高等教育への進学をめざして一時期同地域に留まった。その後、家業を継ぐために故郷の沖永良部島に戻った。

A 氏が島に戻ってからまず最初にしたのは、故郷で活躍している農業の先輩たちから農業技術を習うことであった。A 氏は、当時農業で大成功をおさめていた C 氏と D 氏のもとへ日参した。A 氏は、彼らの土づくりや栽培法などの農業術を盗むように習った。

C 氏は、京都大学農学部卒業後に地元で就農していた。D 氏は、郵便小包による里芋の個人出荷で大成功をおさめていた。C 氏、D 氏の両者ともに農作物の品質が格段によかった。そのため消費者や農業関連市場関係者からの評判がたいへんよかった。そうした品質のよい農作物を作りたいと A 氏は両氏の畑に毎日通うなどの努力を重ねた。

沖永良部島における農業の特長は、農業技術を地域の人々がお互いに勉強し合って品質の高い農作物を生産してきているということである。

島では、農作物を生産するための農業用地面積が限られている。島の農家は、その限定された範囲内でよりよい農業経営をめざすことになる。

限られた農地での農作物の生産にはおのずから量的な限界がある。そのために農作物の品質をすこしでも向上させることが必要であった。品質を向上させることによって量的な課題を乗り越えようとしたのである。島の人々は、全体としての収穫量が少なくとも自分たちの生活が成り立つように工夫してきた。

そのためには農業技術は島の人々全体で共有する必要があった。自分が知り得た新しい知識は、島全体で共有したのである*6。そうしたいわば、同地域の内部で培われてきた厚利少売型の農業経営観が A 氏に形成されていたということである。このことは筆者がみる限りにおいて沖永良部の農業者全体に共通している。

A 氏の農業技術形成の過程においては、“習う”ということが重視されている。“習う”という学習方式は、熟練工や職人などの後継者育成の中でたいへん重視される技術形成方式である。

この方式は、かつての伝統的な共同体社会においてもっとも典型的な学習方法であった。経験的に習得された知恵やワザなどを継承する際に重視された技術形成の方式である。

A 氏が農業をはじめた当時は、キイタバと呼ばれる相互協働システムが残っていた*7。キイタバは、ユイ（結、契約）の一種と考えられるが、労働力をお互いに提供しあい、地域における相互扶助を実現する方法である。キイタバは、その後1970年代になってから農協経営規模の格差が広がる中で次第にみられなくなっていった*8が、この相互扶助システムには、いくつかの下位概念が存在

していた。『和泊町史民俗編』によれば、カシイと呼ばれる見返りを期待しない奉仕や賃銭を受け取る雇用という方法があった。それらの方法は、ユイのできない資産家によってはじめられたと考えられている。

ユイは、お互いに労働力を提供しあう相互扶助である。そのために農業経営の規模が均質である必要がある。経営規模が異なってしまうと、労働力の提供にあたって不公平感が生じる。

島では、連作障害を防ぐために農地の貸し借りが行なわれてきた。同じ作物を同じ畑に育てれば、次第に土地は荒れてしまう。そこで次第に広い土地を農家は求めるようになる。経営規模が大きくなれば、それだけ広い農地が必要となる。

そうした過程で経営規模の格差が生まれてきた。そのためにカシイや雇用というような新たなユイが生じたのではないかと町史は推測している*9。

後述のとおり A 氏は、広大な農地を農作物の栽培に活用している。そのため経営規模の拡大にともなって、それに対応するために広大な農地の借り入れと同時に、大量のパート労働者の雇い入れが必要となった。かつての社会ではカシイや雇用といわれたものである。A 氏は、キイタバに代表される伝統的な共同体社会において行なわれてきた農業生産慣行を受け継いでいる。

沖縄では、今日において“教える”“学ぶ”という言葉を使用することが稀である。その代わりに“習う”^{ナラユン}という言葉を使用する*10。今日においてなお、沖縄の学校では授業の始まりに際して「お習いしましょう」と声をかける。子どもや教師がこれから授業を開始するという挨拶の言葉として使用している。

“習う”という言葉が日常的に沖縄において使用されるのは、沖縄社会における文化や歴史のありようと深いかわりがある。

沖縄においては、伝統的な祖霊信仰が根強く残っている。そのために社会全体が仏教の影響を受けにくかった。

教えるという言葉は、伝統的な用語としては教化という言葉と強い結びつきをもつ。教化は、仏教での使用例がある言葉である。そのことばと近代になって移入された教育がしばしば混同されてきた。

伝統的な用語としての教化と近代以降使用されるようになった教育が両者ともに訓育的な意味合いの強い言葉として使用されるようになる。これは、おそらくこのような事実が影響している。

そうした事情のもとで沖縄社会に「教える」という概念が入りこみにくかったと想像できる。

また、この語彙の発音の上から見れば、oshieru もしくは wosihu というようにエ段とオ段の母音が入りこんでいる。伝統的な沖縄の言葉は、那覇や首里の言葉で言えばア段、イ段、ウ段の三つの母音から形成される。そのため、エ段音やオ段音を含む“教える”という言葉は、表現しづらいものであると推察できる。

さらには、琉球弧の各地にはかつての共同体的な子育て慣行がかず多く残っている。そのもとで見よう見まねで技を習得したり、勘やコツなどによって伝統的な技を身につけたりすることが今な

お大事にされている。

日本国語大辞典によれば、「習う（ならふ）」は、記紀神話や中古の歌謡に用いられるなど日本列島の社会において、たいへん古い時代から使用されてきた言葉である。

この言葉は、学問や技能を習得するという意味をもっている。それに対して“教える”や“学ぶ”は、伝統的には訓育的な意味として使用される場合と知識を伝達するという意味で使用されることが主体である。“教える”も“学ぶ”も、何れも仏教での使用がみられる言葉である*11。

沖永良部においては、日常使用する語彙として“習う”を多用するかどうかの確認はできていないけれども、農業技術を習得する際に“習う”ことがA氏においては重視されていた。

“習う”ということは、学習者が、先達の身体^{からだ}に染みついた手本となる知恵やワザ（技）を見よう見まねで身につけていくという学習方法である。したがって、その知恵やワザは、属身的であり、身体化されている。科学的な計測の難しい非言語的なものである。

今日では、習い事といえば、特定の技能に熟達した先行者から技術の指導を受けるという場合に使用する。いわば、正規の学校カリキュラムからは離れたところで、個人的な趣味や特技としてある技能を習い覚えるというイメージである。ことの吟味は慎重にしなければならないが、さらにいえば、「学」という文字は、男子の場合が多いかもしれないが名付けに使用されることがある。その一方で、「習」の文字は、管見の限り名付けに使用されるということは稀である。

こうした事実を見る限りにおいて、“習う”という概念の私事的性格と、“習う”という行為そのものもっている習う側の主体的行為という特徴を指摘することができる。

3. B氏の場合

その一方で、B氏は、もっぱら試行錯誤による“学ぶ”型の農業学習を行なってきた。沖永良部島では、1990年代に農薬による地下水汚染の問題が取りざたされた*12。B氏はその問題解決のために環境保全型の農業実践を追究しはじめている。また、農業機械の工夫によって農業労働時間の短縮化に努力しようとしている。農業経営の現代化を志している農家である。

B氏は、農業実践にあたって農業分野の専門誌、専門新聞などの情報媒体を大いに活用している。B氏は、筆者が聞き取り調査を行なった直前に環境や人体への危険性の少ない防虫剤のヒントを『農業新聞』から手に入れた。その後、大使館を通じて現地のインドからニームオイルの輸入を行なった。

ニームオイルは、インドセンダンの実を原料にした農薬である。その実から殺虫成分を抽出し、生成した自然環境や人体に影響の少ない農薬である。

B氏は、この防虫剤による花卉栽培を試行している。また、その一方で原料となるインドセンダンを畑や庭先に植え付けている。ニームオイルの原料自体の栽培試験を行ない、農薬自体の自家製造を構想している。その後、より持続性の高い環境保全型生物農薬（糸状菌）の研究に着手している。現在はその使用方法や安全性についての勉強を独学で行なっている。

B氏は、かつて里芋の種の植え付けに関する機械化に成功した。それまでは里芋の植え付け作業をこの地域では手作業で行なっていた。手作業で行なうために植え付け作業にはたいへんな手間がかかっていた。

当時、この地域では、植え付けに際しては里芋を植える向きが収量に影響を与えると信じられていた。同じ向きに植えなければ、品質のよい里芋が作れないといわれていたのである。B氏は、そのことを疑ってみた。そして、みずから機械植を想定して里芋の栽培を実験し、高品質の里芋栽培に成功する。その後、植え付け機械を設計し、植え付け作業を機械化することに成功した。

植え付け機械開発の途上でB氏は、地元の先輩農家から大きな批判を受けた。批判は、手植えで向きを揃えなければ里芋はうまく栽培できないというものであった。その批判の大半は、農業は苦勞して汗水垂らしてようやく成功するというような精神論的な意味での批判であった。しかし、実際にB氏が鹿児島県大隅農業試験場の協力で里芋の機械植による栽培試験を試してみた結果、機械植で手植えとかわらない品質のよい里芋が今まで通り作れることが判明した。里芋植え付け機械が成功した後は、かつての批判的だった農家を含めて、里芋の機械植が地域全体に定着したということである。

その後B氏は、花卉の栽培に関する機械化の構想をたてている。機械化によって炎天下での農作業をすこしずつ減らす。その上で高品質の農作物を合理的に生産できる体制をつくろうと模索している。地元の鉄工所と連携しながら農業機械を試作したり、専門技術者との共同研究を模索したりし、徐々にその実をあげつつある。

農作業においては、人手に頼らなければならない部分が非常に多いという問題がある。機械化しても、結局のところ手作業を厭うては、よい農作物はできないという固定観念が、依然として地域に強く残っている。

筆者の聞き取りによれば、鹿児島県においては1980年代に除草剤が普及した。除草剤の開発、普及は、農業労働負担の軽減化を実現する。その一方で、除草剤の強力な化学成分が自然環境を破壊した。こうした事例は、この固定観念を強化する結果となった。

A氏の場合には、大量にパート労働者を雇用している。これによって農作業のための労働力を確保している。

農作業は、広大な農地で炎天下行なわなければならない。その過酷な手作業の部分をそうしたパート労働力によってこなしている。

パート労働者の農作業は、歩合制である。手際よく作業すれば、その分だけ労賃を多く受け取ることができる。一面では、パート労働者、特にその担い手となっている農家の女性たちにとっては、副収入の機会としてありがたがられている。しかしながら狭い島の中でそうした手作業に依存した農業をすすめて行くにはおのずから限界がある。

パート労働者の雇用は、かつての小作制と同様に身分保障や収入の不安定なパートタイムという労働形態を温存することにつながっている。

パート労働者側にとってみれば、家計の足しになるという効用がある。短い時間で現金収入を得るよい機会であるが、若干の利益になるとはいつても、現状では農家の女性たちに過酷な農作業を結果として押しつけてしまっている。

B氏は、そうした課題を乗り越えるための方策を考えている。B氏の思い描く機械化は、ひとつには農業イコール過酷な重労働といったイメージを取り除くために必要なことである。機械化の導入や安全な農薬を使うなど合理的な農業実践観による自立的な経営をB氏らはめざしている。

4. 環境保全型の農業と二つの学習論

“習う”型の学習論は、近代学校が普及する以前から職人や芸人などの世界に代表されるように専門的な技術形成の在り方としての系譜を持っている。この考え方は、ものごとを数値化して、客観化、抽象化する近代の科学的な教育体系にはなじみにくいものであった。“勘”や“コツ”といったような、いわば身体に刻み込まれた“てわざ”の非文字文化世界においては、大変重要な技術形成論である*¹³。

今日まで農業技術を継承し、発展させてきたのは、主として“習う”型の学習論であった。歴史学でいうところの近世期に入り、新たな農法の開発、普及によって農業社会においては、文字の読み書きが必要となった。しかしながら、気候や土壌、生物など自然を相手にする農業にとっては、植物や土壌、天候の状態をみきわめるための勘が必要であった。毎日刻々と変化する自然の状態をみるためには、経験がものをいった。長い経験によって身体に刻み込まれた知恵やワザが必要であった。

A氏が実践してきたように農業者の多くは、先輩農家のやり方を見習った。経験豊富な先輩農家を見習いながら試行錯誤して自分なりの農業術（art）を我がものとしてきた。いわば農業における人づくりのカリキュラムは畑や田んぼに潜在的に存在してきていた。はっきりとは眼に見えない知恵やワザは、農作業をとおして人々の身体の内部に形成されていった。

しかしながら、近代学校の成立とともに知識や技術が記号として蓄積されるようになった。科学的に分析することによって知識や技術は分かち伝えられるようになった。そうした展開の中で科学的に認知できないかつてのワザや知恵は埋もれていった。学校の外側でわずかに人々の身体の内部に残るのみとなった。

この歴史の中で“習う”から、“学ぶ”へと学習論、教育論の変動が起き始める。それは、初等教育が普及し、通学率が向上し始めた1910年代以降のことであった。

近代学校の成立は、記号化した知識を蓄積し、農業における科学を成立させてきた。科学は、新たなものづくりの技術をうみだした。その中で化学的に合成した肥料や農薬を開発し、普及させてきた。むろん、その背景には、利潤追求型の企業や団体の存在がある。狭い農地の中で効率的に農作物を生産し、おおきな需要の要求にこたえる必要がそこにはあった。

結果としてみれば、近代学校において形成されてきた「学ぶ」学習論や教育論が化学肥料や農薬

依存による大量生産、大量消費の近代農業を皮肉にもつくりあげてきたとあってよい。

伝統的な“習う”型の農業「形成」カリキュラムの内部で育てられてきた農業者たちは、文明の生みだした無機的な栽培法の世界に放り出された。そうした中で彼らは農業生産に従事し、自ら健康を損なってしまう。さらには自然環境汚染の片棒を担わされてきてしまった。A農家の農業世界での成功は、そうした系譜の一部に位置づいている。

“学ぶ”型の農業技術形成論の場合は、近代的な知識伝達方式のもとで個人が個人としてよりよく生きていくという近代教育社会に誕生した。かつての伝統的な共同体社会にはほとんど存在しなかった“学ぶ”農業者が、近代学校の成立とともに登場してきている。

近代学校の成立は、知識の分かち伝えを可能にしてきた。その一方で芸術や文化の背景に理性的な人間の生き方を追求してきている。

沖永良部のB農家は、情報を入手し、分析し、経営戦略をつくりあげる。その上、農業者としての充実、さらには人間としての充実を志向している農家である。

B氏は、分からないことはあらゆる方法で勉強するという姿勢を貫いている。まさに“学ぶ”農業者である。伝統的な共同体社会と同様の方法で“てわざ”を見習いながら農業術（art）を勉強してきたA氏とはまったく異なる道筋をB氏は今日までたどってきている。

B氏は、農業技術の近代化とともに登場してきた化学肥料や化学農薬による自然環境の汚染や加重労働による農業者の人間としての生き甲斐を追求しにくい労働環境に対して、問題意識を持つようになった。そのきっかけは、さまざまな情報を収集し分析しながら、ものごとを科学的、合理的にみるという島の外での勉強を基盤として生じた。

通常の労働者と同様に労働時間を過剰に延長しなくとも必要な農作業を終えられるのではないか。芸術や文化を享受し、愛好し、いきいきとした生活を営んでいくことが農業世界においても可能なのではないか。そうした問題意識がB氏に生じた。農業生産方法の合理化や近代化、さらには環境保全型の農業経営の創造にB氏は挑んでいる。

問題は、B農家のような典型的な“学ぶ”農業者が充実した学習と工夫をとおして、さらにその気になって勉強しようとしても、さまざまな障害があるということである。革新的な試みを抑圧する地域の封建的な体制は、昼夜となく激しい労働をしてこそよい作物がつくられるという伝統的、かつ禁欲主義的な観念を依然として支えている。農業機械の開発にあたって必要な資金はすべてみずから生み出さなければならない。たとえば、新たな農業機械導入を発想しても、それを専門技術者が実用化のために研究をしたり、開発費を提供したりする環境が現状では極めて劣悪である。朝早くから深夜おそくまで汗水垂らして働くことが美德であり、買い物に行くのに洋服を着替えて出かけるなどということはタブーであるというような封建的な住民の意識がまた大きなハードルとなっている。

さらには“習う”型の農業における「形成」の潜在的なカリキュラムが豊かに持っていた“てわざ”の文化が生かされにくいという問題がある。農作物の病気や風水害、台風など過酷な天候に対

処するワザや知恵が伝承されずに埋没し、また本質的に科学的には分析不可能な勘やコツに頼らざるを得ない部分の農業術が後継者に伝わらなくなる問題がある。

A農家は、非常に効率的に生産性を上げ、大量のパート労働者を雇用し、17町歩に及ぶ借地を活用した通年栽培を実現している。そもそも高品質の農作物を生産することで狭い島の中で生き残ってきた農業者たちは、ある程度までは人海戦術で現状の課題を乗り切りつつあるように見える。しかしながら、環境保全型の農業を指向するこれからの農業経営にあたっては、伝統的な農業における「形成」の潜在的なカリキュラムの再考によって“習う”という身体的な学習方式を取り戻すことと同時に、“学ぶ”型の農業教育カリキュラムの開発と農業哲学とでもいってよい高度な学問的追究が不可欠となるだろう。

沖永良部島においては、化学肥料や化学薬品による農作物の栽培や病害虫の駆除によって、深刻な水質汚染、健康被害が起こりつつある。この点で、“習う”と“学ぶ”の結合による農業技術形成、教育論の研究と実践が今後追究される必要がある。

註

- * 1 本学部教育学研究室による共同研究。
- * 2 和泊町教育委員会『和泊町史歴史編』12頁，1985年
- * 3 同前12頁
- * 4 同前12頁
- * 5 B氏による。2001年7月27日，B氏宅でのインタビュー。
- * 6 狩野浩二「和泊町国頭における情報型共同体づくりと子ども・青年の進路選択」、『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』第11巻，2001年
- * 7 和泊町教育委員会『和泊町史民俗編』240頁，1984年
- * 8 狩野浩二「和泊町国頭における情報型共同体づくりと子ども・青年の進路選択」前出，50頁
- * 9 和泊町教育委員会『和泊町史民俗編』前出，241頁
- * 10 沖繩国際大学教授の野原三義氏からご教示いただいた。
- * 11 『日本国語大辞典』小学館，縮刷版1980年，第8巻，342頁，同第2巻，566頁，同第9巻1130頁による。
- * 12 田代豊，谷山鉄郎「集約的農業地域・奄美群島沖永良部島における地下水への農薬混入」、『日本作物学会紀事』1996年，77-86頁。神田嘉延「沖永良部和泊町の環境問題と地域の自立的発展」、『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』第11巻，2001年，38-39頁
- * 13 大田堯『教育研究の課題と方法』55頁，1987年，岩波書店。初出「現代社会と子どもの発達」，岩波講座『子どもの発達と教育』1，1979年，岩波書店。

[附記]

本稿は、鹿児島大学がプロジェクト研究としてすすめている「新しい鹿児島学」事務局発行による『〈新しい鹿児島学のリーフレット〉鹿児島学のプロフィール4』2002（平成14）年7月27日に筆者が分担執筆した「環境問題と鹿児島島の自立的発展の展望を求めて」（神田嘉延・狩野浩二共著，分担執筆部分20-22頁）を大幅に書き換えたものである。本研究にあたっては、科学研究費補助金の助成を受け、筆者が共同研究者として加わった調査の一環として執筆したものである。調査にあたっては、和泊町教育委員会、永吉敏人氏に物心ともにお力添えをいただいた。記して感謝申し上げる。